

Bulletin

2013 **10**
Vol. 245

The Japan Institute of Architects Kanto-Koshinetsu Chapter



特集：AG2013 建築祭

・アーキテクト・ガーデン 2013	藤沼 傑	2
・アーキテクト・ガーデン 2013 基調講演		2
・講演会・シンポジウム		3
・展示・ワークショップ		5
・街歩き・見学会		5
・相談会		7

学生卒業設計展

・JIA 全国学生卒業設計コンクール 2013	インテグレートデザイン アソシエイツ	矢田康順	8
・第 22 回東京都学生卒業設計コンクール 2013	日本設計	三塩達也	9
・大学院修士設計展実行委員会	前橋工科大学	石田敏明	10

対話と調停	梶浦晩建築設計事務所	梶浦 暁	11
構造設計者として	大建設	長坂典和	11
北京 GALAXY SOHO	Zaha Hadid Architects	内山美之	12
「グローバルとローカルの間にあるもの」	連健夫建築研究室	連 健夫	14
EIJI (山根英治) 氏に聞く「NEW YORK DRY CUT ~技術を極める」			

————— Bulletin 編集委員 16

大切に使い続けよう歴史的建造物 和田堀給水所・要望書提出で考える			
	M I U 建築計画事務所	松田賢一	18
JIA Aグループ研究施設見学会 報告	大洋基礎	杉本法司	19
JIA 埼玉 2013 活動方針	ツルサキ設計	鶴崎健一	20
アメリカ広葉樹木材の現地を訪ねて	鈴木理巳建築計画所	鈴木理巳	22
公開シンポジウム「アート表現と建築表現」	相坂研介設計アトリエ	相坂研介	24
「金曜の会」は建築家クラブでトークイベントを開催しています	Fallinglight	稲垣雅子	25

建材情報			26
支部ダイジェスト			26
こんな本を読みました「2052 ~今後 40 年のグローバル予測」	相田土居設計	土居志朗	27
編集後記●「月見」			27



「グローバルとローカルの間にあるもの」

RIBA イブニングレクチャー／
3.11 とグローバルデザイン連 健夫
(むらじたけお)

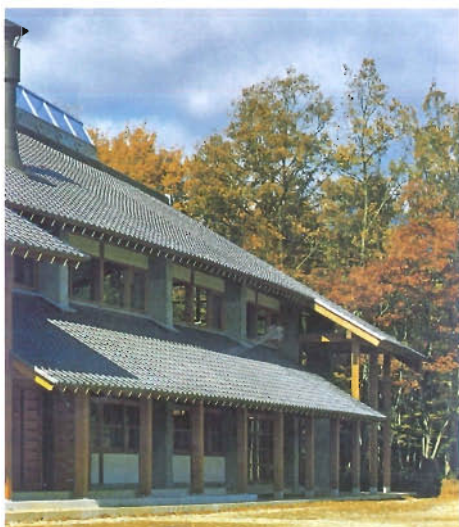
2013年6月18日、RIBA（王立英国建築家協会）にて「3.11 とグローバルデザイン」をテーマにイブニングレクチャーを行った。講演者は、長島孝一氏、新居千秋氏、松原弘典氏、と筆者である。これにゲストスピーカーとして香港大学のトーマス・チャン氏が加わった。2011年のUIA 東京大会において、同テーマのシンポジウムを実施し、その成果をまとめ、鹿島出版会から「3.11 とグローバルデザイン」を編著者：日本建築家協会・デザイン部会として出版した。昨年の夏、筆者がRIBAを訪問し、この本をディレクターに差し上げたことがきっかけとなり、このイブニングレクチャーが実現した。テーマがテーマだけに人数が心配されたが、30名を越す参加者がありディスカッションを含め盛り上がった。



RIBA（王立英国建築家協会）イブニングレクチャー

最初に筆者から東日本大震災後における建築家の様々な活動を紹介すると共に、筆者が関わっているいわき市豊間地区の復興協議会事務所づ

くりや災害公営住宅のワークショップについて報告をした。住民と一緒に造った復興協議会事務所が、目に見える形で彼らに自信を与えたこと、その後の復興ワークショップにおける住民の意見を計画



那須友愛の森（新建築、1987-1-3）

に反映させようとする東京支援グループの役割、それを受け止めた気持ちはあるが、人材が不足している自治体のジレンマを含めて報告した。その復興プロセスの現状分析の中で、災害以前から問題となっていたことが顕在化・先鋭化しており、その解決としてグローバルアプローチの必要性を指摘した。

長島氏からはグローバルアプローチとは何なのかの説明された。そもそもグローバルとは、地球化（グローバル）と地域化（ローカル）を一緒にした造語であり、それは1999年のUIA北京大会にて氏が、これからの建築・まちづくりに必要と提唱したものである。氏はグローバルの歴史的位置付けと共に、日本の「風土」とは何なのかを分かりやすい図を用いて説明された。また、氏の作品「那須友愛の森（定住センター・自然観光館）」を通して、設計において地域性に関する建築家自身の思想（解釈）の大切さを説明された。更に、氏の自邸を通して日本の伝統的民家の特質と維持保存することの難しさを語られた。

新居千秋氏は、住民参加によるワークショップの意味を作品を通して説明された。世界で唯一のものを創るためには「サイトスペシフィック」と「住民参加のワークショップ」により脚本を作ること。これが建築における物語性となる。という枠組みを示した上で、大船渡リアスホールと由利本庄のカダレーのデザインプロセスを詳細に説明された。ワークショップを通して建築が魅力的に変化することがビジュアルに分かりやすく説明された。特に大船渡リアスホールは震災後に避難所として有効に使われたことが、当時の写真からも感じ取ることができ、住民にとって身近な施設であり、見え隠れする有機的空間が、多くのコーナーをつくり安心感を与えていることが理解できた。



大船渡リアスホール（大船渡市民文化会館）

松原弘典氏は、コンゴのキンシャサにおける小学校づくりのプロジェクトを通して、大学教育における「建築」と「教育」と「医療」分野の協働、現地コンゴと日本との協働の意味を浮き彫りにすると



コンゴ民主共和国キンシャサ、アカデックス小学校

共に、グローバルとローカルの3つのバランスについて説明された。それは①（材料）においては現地材を使うことの大切さ、②（構法）においては地元と日本、双方の技術を上手く使うこと、③（協働）においては、日本で事前にデザインすること、と現地においては現地の人と一緒に組み立てること、と説明した。

ゲストスピーカーのトーマス・チャン氏は、自身のアートワークを通し、アートの間口の広さ、すなわち解釈の広さや深さの自由度を含めて説明された。特に既存建物を使つてのワークは制限があるが故に、むしろアートが活かされダイナミックなものになる。既存がローカルとするとそのイメージの拡がりグローバルであるとも指摘した。

ディスカッションでは、大きく2つのポイントがあった。1つは被災地支援における海外（外の者）の役割である。災害が起こった直後は海外からの支援は有効であるが、復興のプロセスにおいては、住民の意思決定が大切となり現地との強い繋がりが無いと難しい。これは日本の中でも同様であり、被災地支援は、現地との繋がりが弱いと、住民の想いを引き出す参画のプロセスをつくるのはどうし

ても難しいのが実状である。2つめのポイントは「グローバルとローカルの間」についてである。AA スクールのヒンスレー教授からの質疑で、ローカルからグローバルの方向について、いきなりグローバル化するのではなく、その間には様々な段階があるのではないかという指摘である。ローカルといってもその範囲を限定することはできない、またグローバルといっても同様、範囲を限定することはできない、つまりその間はグラデーションであり、あえて分けることはできないという論である。議論の中で明確になったのは、グローバルとローカルの両方を意識して捉えていることが大切ということである。俯瞰的に見つつ、しっかりと地域に入り込む専門家が、被災地に求められているが、それは正しく、このことを表わしていると言える。地球化はオープンな意識であり、興味が外に開いた学びの態度とも言える。その態度を持った中で、地域に入り込む、これは、正にコミュニティーアーキテクトに求められている態度であり、それは災害復興のみならず、これからの建築と街づくりにおいても必要とされている建築家の姿勢であろう。筆者は1991年から5年間、AA スクールで学生・教師として過ごしたが、その時、コミュニティーアーキテクトについて、AAのみならずRIBAなど様々な所で展示会やシンポジウムが開催され議論があったことを思い出す。そこには多様な民族と多様な文化を持つ国であるが故に、住民の意識を含め地域性を俯瞰的な視点で反映させる仕組みと態度が必要とされる背景があったものと捉えることができる。東日本大震災を経験した日本は、その機会を良い意味で活かせるか否かが、建築家に問われている。このRIBAでのイブニングレクチャーを終えて改めて感じたことである。ゲストスピーカーのトーマス・チャン氏から「次は香港大学でもやりましょう！」との話があった。この活動もグローバルと言えそうである。

〈(有) 連健夫建築研究室〉



いわき市豊間地区連絡所兼復興協議会事務所



懇親会：ヒューゴ・ヒンスレー（右から2番目）、ニコラス・ポヤスキー（右から7番目）も参加